



「大切だから、歌いたくない」

音楽会で歌うトカちゃん一家とのくらしの曲づくり。4曲が出来上がり、最後の1曲「去勢や命についての歌」を考えている際に、Mさんが話し始めました。

「去勢の時、トットは嫌な思いをしたのに、この歌を歌えば、トットはまた嫌な気持ちになるかもしれない」Mさんの話を聞いて、「確かに、去勢は悲しかったし、歌ったらかわいそうっていう気持ちもわかる」と子どもたち。「トットのことが大切だからこそ、歌わない方がいいのではないか」というMさんの考えに触れ、子どもたちは迷い始めました。

そんな中でH君は、先日トットが他の学年の友だちから心無い言葉を投げかけられたことを引き合いに出しながら、「去勢のこともちゃんと伝えて、自分たちにとって、トットたちがこれだけ大切なヤギなんだよ、ってことを伝えられたら、その子も『悪かったな』って思うんじゃないかな」。S君は「次に雄ヤギが生まれたとしたら、ぼくはもう去勢はしたくないんだけど、そう思った理由とかまで伝えればいいんじゃない?」と続きます。

次の日もこの話し合いは続き、K君は「去勢が本当によかったかは、わからないけど、3匹でくらししていくために、去勢は必要だったと思う。Mちゃんの考えもわかるけど、ぼくは歌いたい」と力強く語っていきました。そして、Mさんも「歌うことがダメってわけじゃなくて、トットが苦しかったこととか、トットが嫌な気持ちにならないといいなって思うんだよ」と、音楽会で歌うことの中でも、トットを大切にしたいという気持ちを語っていきました。



「大切だからこそ、歌いたい」

「大切だからこそ、歌いたくない」「大切だからこそ、歌いたい」そのお互いの気持ちの根底にあるものを子どもたちはそれぞれに感じている様子でした。そして、話し合いを通して、改めて「トカちゃんたちを大切にしたい」という思いを共有した中で進めていった歌詞づくり。子どもたちからは、トットへのあたたかな思いや、去勢を決めた6月の自分たちへの問いが溢れてきました。そして、子どもたちと一緒に考えた、この特別な歌の歌詞に音楽の先生がメロディーをつけてくれました。

出来上がった「トットの歌」、この歌との出会いの場面。歌を聞きながら、黙って下を向き、じっと、ずっと何かを考えていたS君。歌を聞き終わった後に、涙を流しながら、トットへの今の自分の思いを語ったYさん。動物とくらすことへの今の自分の考え、これまでの学びについて語ったAさん。「歌の力」「音楽の力」によって、自らを見つめ直していった子どもたち。この「トットの歌」は、子どもたちにとって特別な曲になっていきました。

迎えた音楽会当日のステージ。トカちゃんたちが大切だからこそ、この歌をどう歌っていききたいのか、どう伝えていききたいのか。「トカちゃんたちとのくらし」を、また、「トカちゃんたちと共に生きるわたし」をそれぞれ見つめながら、歌う子どもたちの姿がありました。

